

吉野 一重 九岡 八重  
戀場 王 夜  
相花 夜

石ふ智作  
くさずのあ

初編中

初編上

横山町  
文  
初編下  
元田長





10

15

20

25

戀相場花王

初編

上巻

夜下巻

猫々

道人化

梅峯

園改画

金松峯梓



花と花咲重りて芳桠山一重ハ餘處の八重ハ勝まりと  
 故人梅屋鶴壽翁ガ彼地紀行の詠歌も夫う何うぬう右左り  
 眺望る花の映ひ易く一重ハ八重ハ先達て盛り衰ふ浮世の  
 慣ひ春の日高も早晚ハ入相櫻の鐘供養鐘も撞木の當り  
 ころ忽ち如夜又の面相小輪回の焔火粉と散ら一嫉妬鬼  
 聞と新聞紙上ハ幾回と重ね一吉野ガ妻阿仲ガ狂ふ意  
 の駒と繫ぎの糸一仇櫻藝妓ハ八重ガ戀の淵ハ濱の  
 白波打寄せて未ハ三筋の氷調子浮ハ音締の約束うり  
 茲ハ因果と重咲栄枯ハ時の空米相場花ハ嵐の紛紜と  
 三編續き小記延て再櫻木ハ上まよまん  
 明治十三年第四月 金花猫翁魯文戯誌







總相場花王夜嵐初編巻上

東京

猫々道人著述

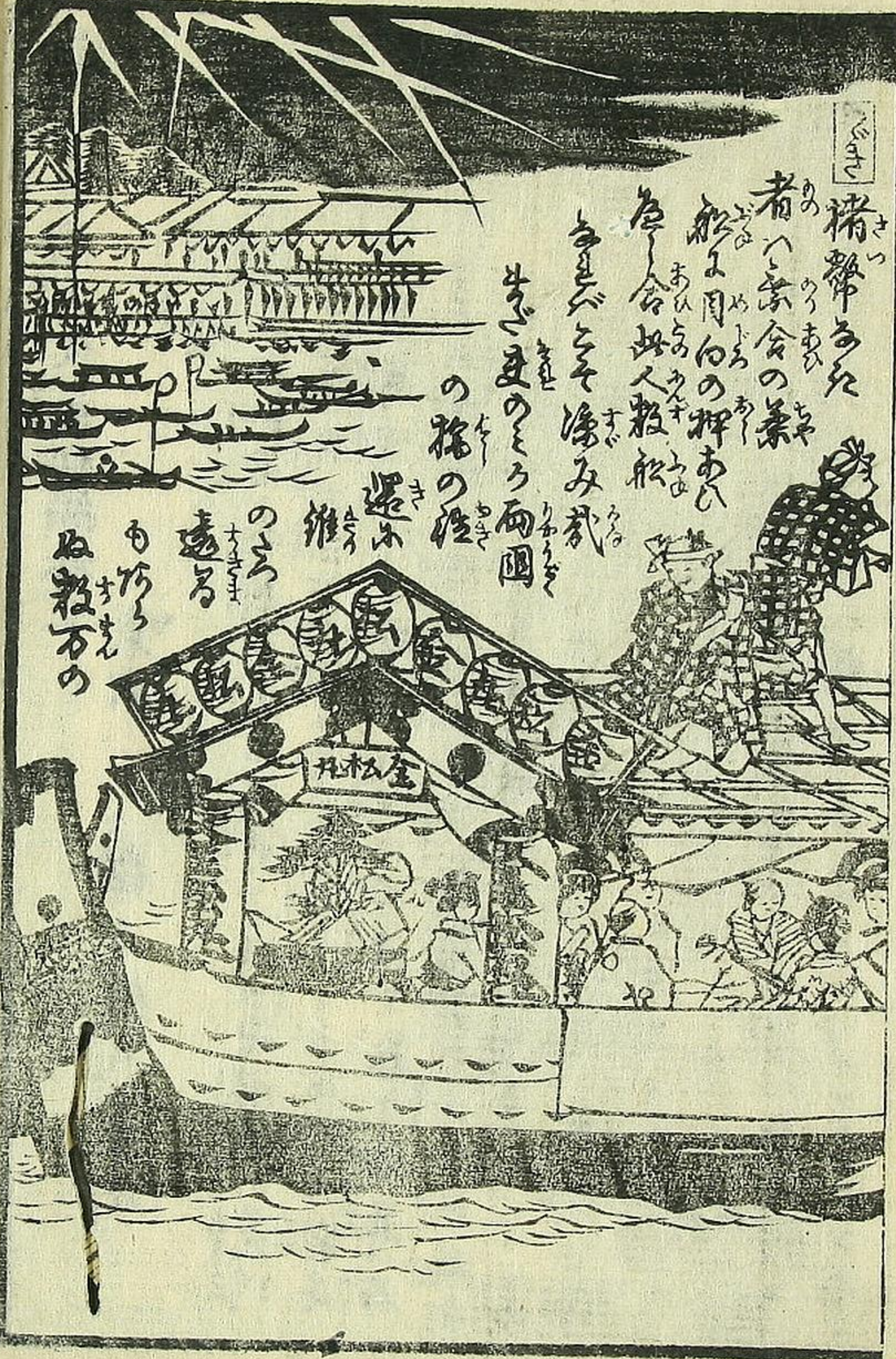
開場

江戸の流しは絶えて然も元のお江戸は水源地荒川  
 二流を分けても荒波山と正高と看るを以てその門は榮  
 るりと難ひ東岸隅田堤と業平朝臣の古海を敷く西岸石  
 濱の磯趾と止め橋場の渡り今戸の光宗真乳の山は水西ふ  
 其際と留して澆が池の名を給ひ仲春の向ふ島の花は  
 仲秋の山登場の日と唄くその中流よりゆたう入船の炎夏と海  
 意の川網漁故ら仲夏は此門と開く林への両網橋は花を渡屋  
 が機園花火そのあまの賑ひ二百年來今も夏に半橋船家  
 根おね汁とがし吹よ川風あまは上羽簾中のか客ハ華士族年  
 民全権あるハ妻妻と携へ藝妓といとのどんつくスツチヤン



受物流星  
虎の尻巾  
花を疑  
扇と巻る夫  
又とらみ打  
揚巻く花  
火の光りと聖  
と列る挑灯の  
明りふ掃の東西  
白昼のどく打

群集  
の人海の中  
さし由銀の  
度小浜小  
両舟のまて  
商人の立込  
む中み  
顔冠り  
せ



者へ余金の葉  
船よ月白の輝あり  
為し合此入船  
まはるそ海み哉  
生てまのころ両團  
の標の注  
遠る  
ぬ教石の



中と押分て新  
 柳所の方と  
 せしを  
 是なり

おる向へ来りるハ危所末高  
 仲買多くと紀つりたる引  
 挑灯小風只後獲之持る年  
 以二十二三の店者風  
 投標

易刀二

五

挑灯社



胡礼の若者  
 地の懐中腰  
 俵の雙  
 降りきまろく服の  
 又隠しそら  
 無家ふかしも  
 おと元柳橋の方より  
 小田原挑灯社者不照  
 させ給の重ね糸の  
 美藤まご人目ふ  
 そとと藤枝の  
 坐安出込金

雙の飾りの冊湖の九分五  
 銀箱目が  
 担ひ  
 曲者  
 阿レヨ  
 逃  
 曲者  
 阿レヨ  
 逃  
 曲者  
 阿レヨ  
 逃

四

波曲者の胸ぐら



波曲者の胸ぐら  
 板あけおのふ  
 くりしふかま  
 の銀かんざし  
 とお返し  
 後根立  
 ありお返し  
 女流しあるふ曲  
 者の雲と霞  
 逃去りたる  
 後し左り徳と  
 するおえい  
 るがう小腰と屈

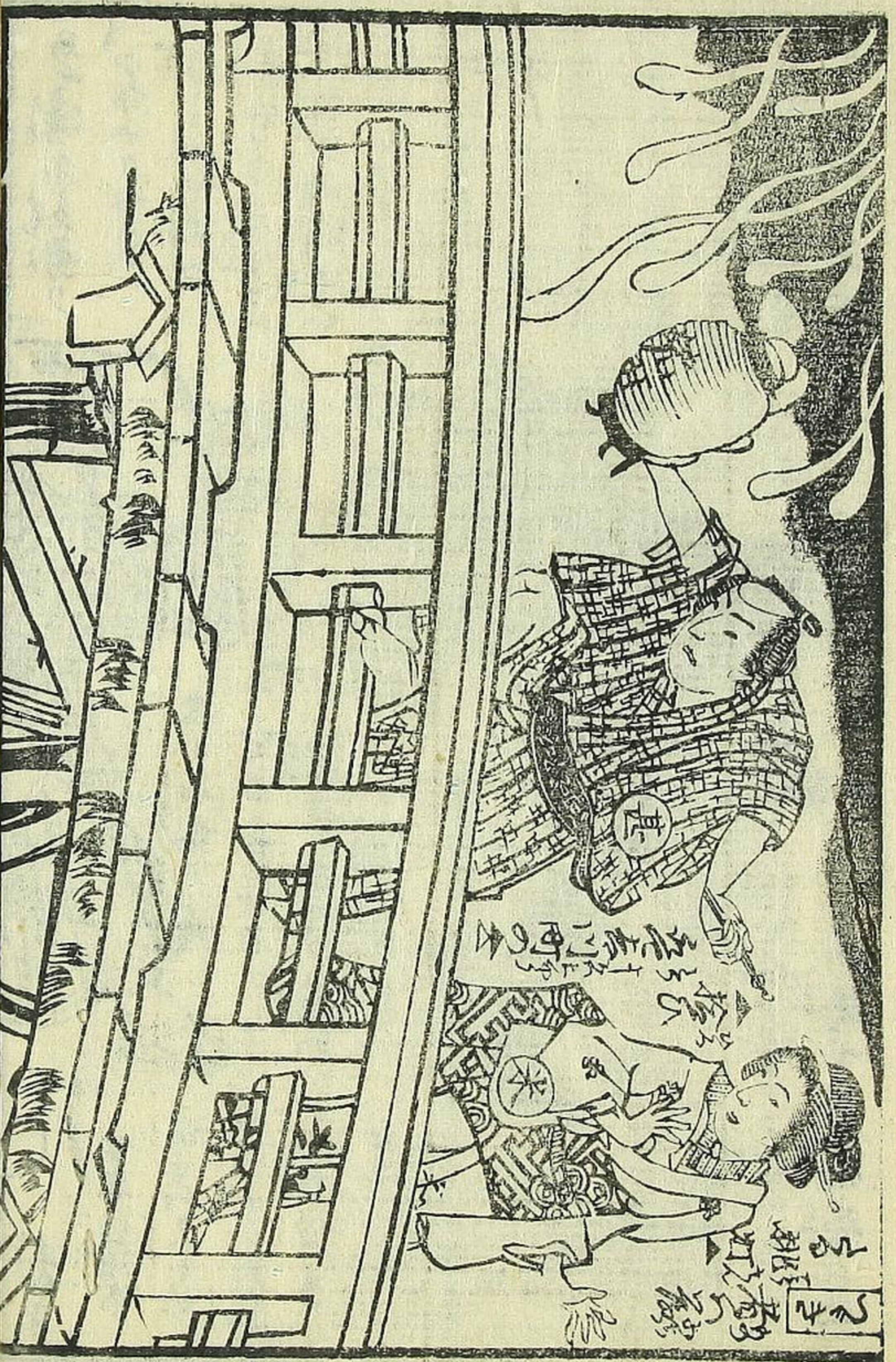
境町  
 キットおれ  
 どのの  
 お方  
 町書地  
 表の者ナンでおれお及  
 米  
 用



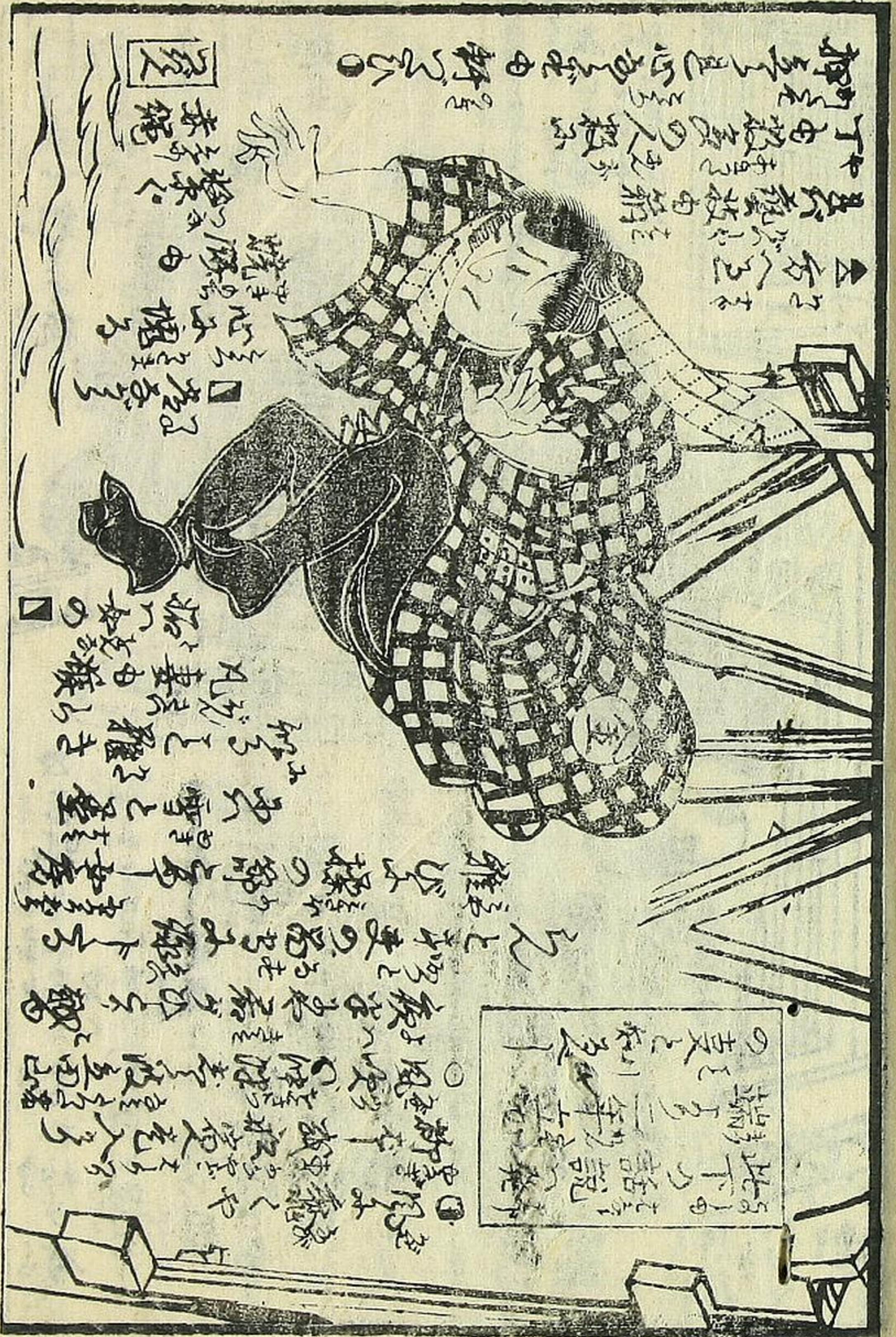
めく僕小まき  
 どのさあ  
 ねトませぬ  
 嘉等の分  
 大板多洲  
 洗小煎ら  
 ぬらとま  
 扱よま方  
 ああを  
 を先よ返  
 いかさ  
 ませぬ  
 の出がけ

お名  
 果を「アコ  
 境町の  
 産ハ  
 心も  
 せうが  
 一寸お名  
 とト  
 同書の  
 波曲者の胸ぐら  
 米  
 用





五方へ去  
丁由救急の人救ふ  
押入は心算を由新入



此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

△方へ去  
丁由救急の人救ふ  
押入は心算を由新入  
五方へ去  
丁由救急の人救ふ  
押入は心算を由新入

金  
甚  
米

此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

○此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

○此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

○此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

○此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

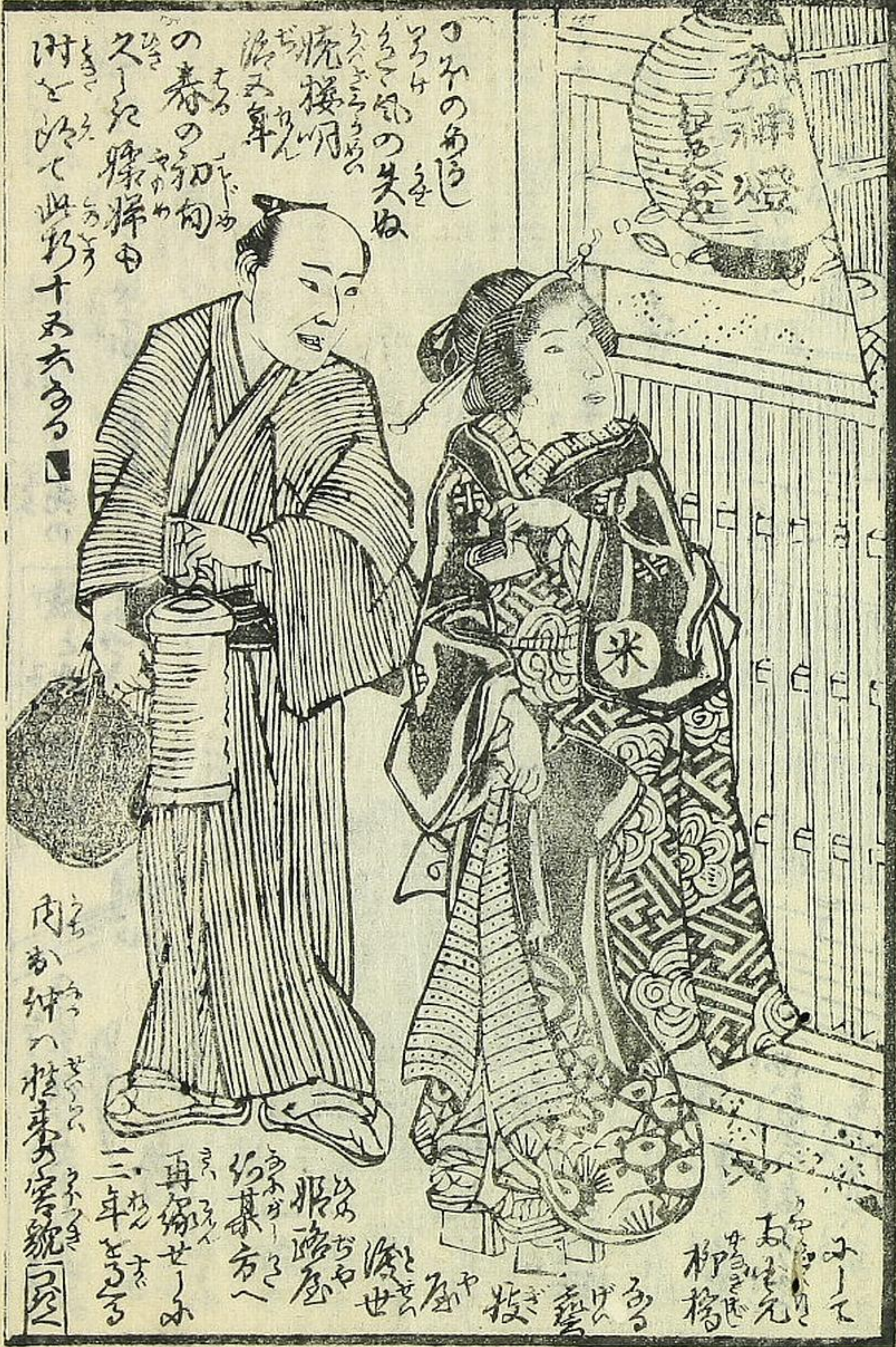
○此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

○此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

○此下少語説  
端より二年十二  
の麦と和は是

木の目易の上

上



日中の角は  
 夕ぐせの美敷  
 花接明  
 春の初旬  
 久しに様様由  
 時を以て此物十五六ある

肉か紳ハ桂妻宮統  
 再編せしふ  
 三年を言  
 柳橋  
 小一七  
 五元  
 柳橋



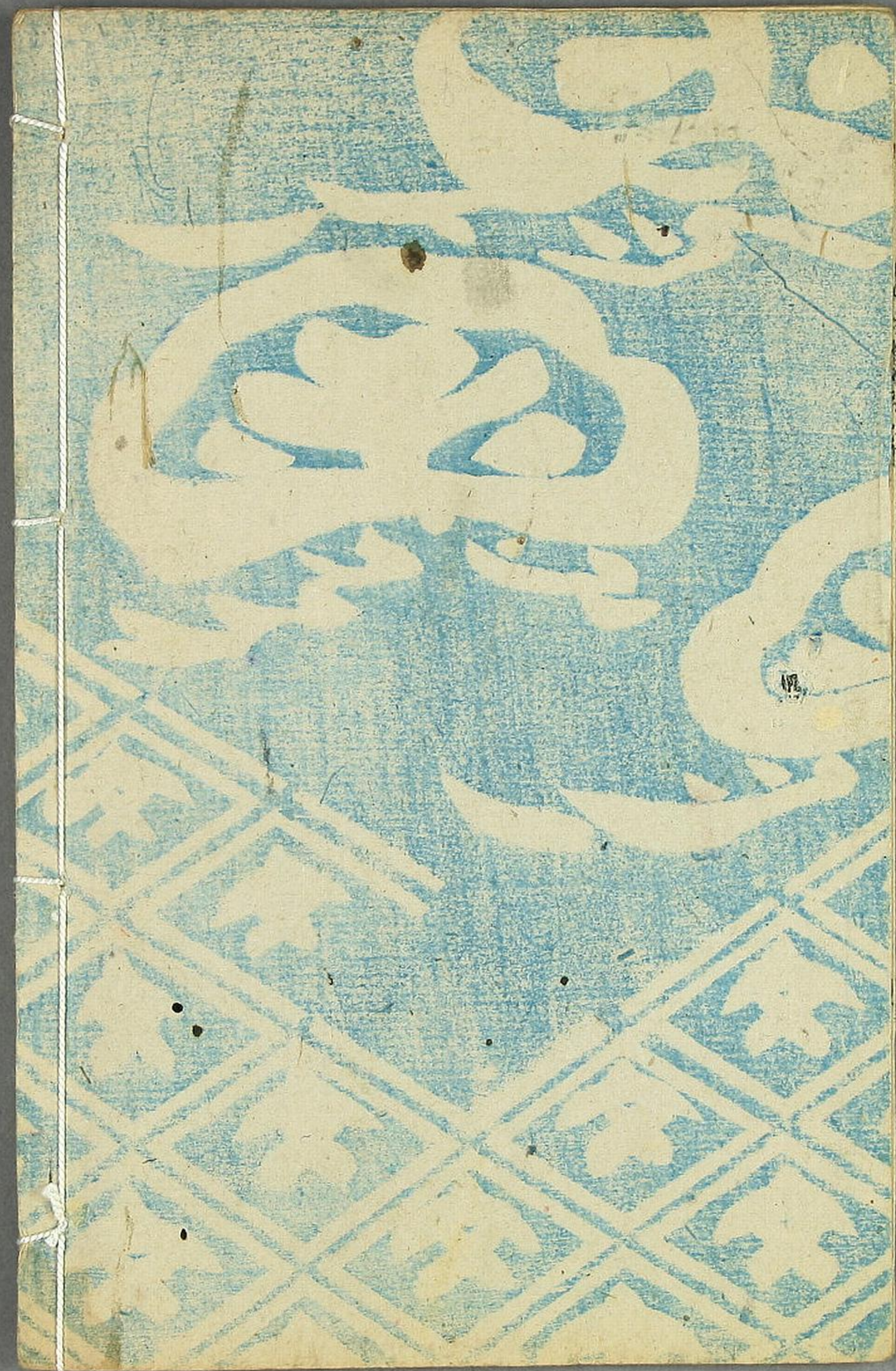
東条日本  
 樽匠喜地  
 平氏系高去  
 とき来と能て杭  
 色を好通

公青野志之弟が妻お仲う  
 柳よよりて本女の姉と  
 のそりてお飛よ登鏡の  
 若と若ハ一裁刺海法と  
 一様茶その系由と  
 ともくお仲が母お繁とり  
 ろい今奉る千と  
 りそく奉はらあちする  
 厭ひて夕夕の湯一化  
 ののちら〜若の  
 花書

柳橋  
 小一七  
 五元









吉野 一重 九岡 八重  
戀場 王 嵐  
相花 夜

石ふむ作  
くはまのあ

初編中

25

20

15

10



戀相場櫻花夜嵐初編中之卷

東京

猫々道人戲著

子女の膏油と伎り其肉と食ふ事一たる者父母許して  
 其途を齋がしむるより絨履も何ぞ如ん世の儂欲不  
 浪今年ハ十六氏藏親の子と食ふ深葉窟と儲も波能搗  
 阿葉ハ根途身と雜別の渡み賀久松の家より食はると  
 あるうちも座しと喰ふ山も空しく纏う斯への令我衣類  
 もよりの間み遣ひ棄貨本と身込む履か仲も將路をの故  
 隣もわらんと再び蕨枝よ歩きも出まを去ると何侍も  
 浮架くと母子遊びて暮らるも麻らむ幸ひ女も渠是の  
 周旋家も久松と頼むてか仲不安且形とあうり之人文

恋相場切中







同元さへ  
 此下りか件  
 へ敷むと  
 藤まき傍  
 桐と献書  
 茶の給仕綱  
 六層の物ぐと  
 茶の湯見を  
 形むべき世結  
 まる人のあら  
 ろくか膝との  
 懐合川深甲  
 髪小更さる

下目高切

金  
 の  
 あ  
 の  
 一  
 文

由  
 の  
 切  
 子  
 の  
 儀  
 律  
 當  
 時  
 の  
 知  
 者  
 の  
 方  
 小  
 母  
 傍



湯き流りふ能  
 実を虚をらち  
 混て身のを命  
 をさめくと傍を  
 固て新舊を  
 よう流く霧ひ  
 か伸はあのを  
 唐摺摺して今  
 と蓬りの泥の  
 ささる衣服の  
 中らに汝女さ  
 月まぬ木地の  
 別様とるる

下目高切

此  
 の  
 世  
 後  
 之  
 世  
 後  
 之  
 世  
 後  
 之  
 世

母の心は海に  
 さみしく  
 おまへ下さるる  
 細と活せお母  
 安堵の上の母  
 子の身にかん憂  
 せふ故まきうと知由  
 薄の定めまくらふ  
 向ふの岸小埃地のあ  
 め小橋ふ水隔らま  
 術綱文と合系車  
 の里の柳町西をぬり  
 なる船のふらりい葉舟に



母と大橋のお魚軒よ  
 うまやと生橋の橋  
 よとお船の引合ひ  
 活者の足袋履の  
 母子の馳を換ふ靴履  
 の履をぬりしま  
 此家小海り  
 後の雅風と由白帆  
 をあらう浪小つ



母の心  
 さみしく  
 おまへ下さるる

めか伸の少くま  
 毛後肉小入り  
 母お船ふ云葉  
 世世と葉  
 細の藤  
 大綱  
 母の心  
 さみしく  
 おまへ下さるる

母の心  
 さみしく  
 おまへ下さるる

三

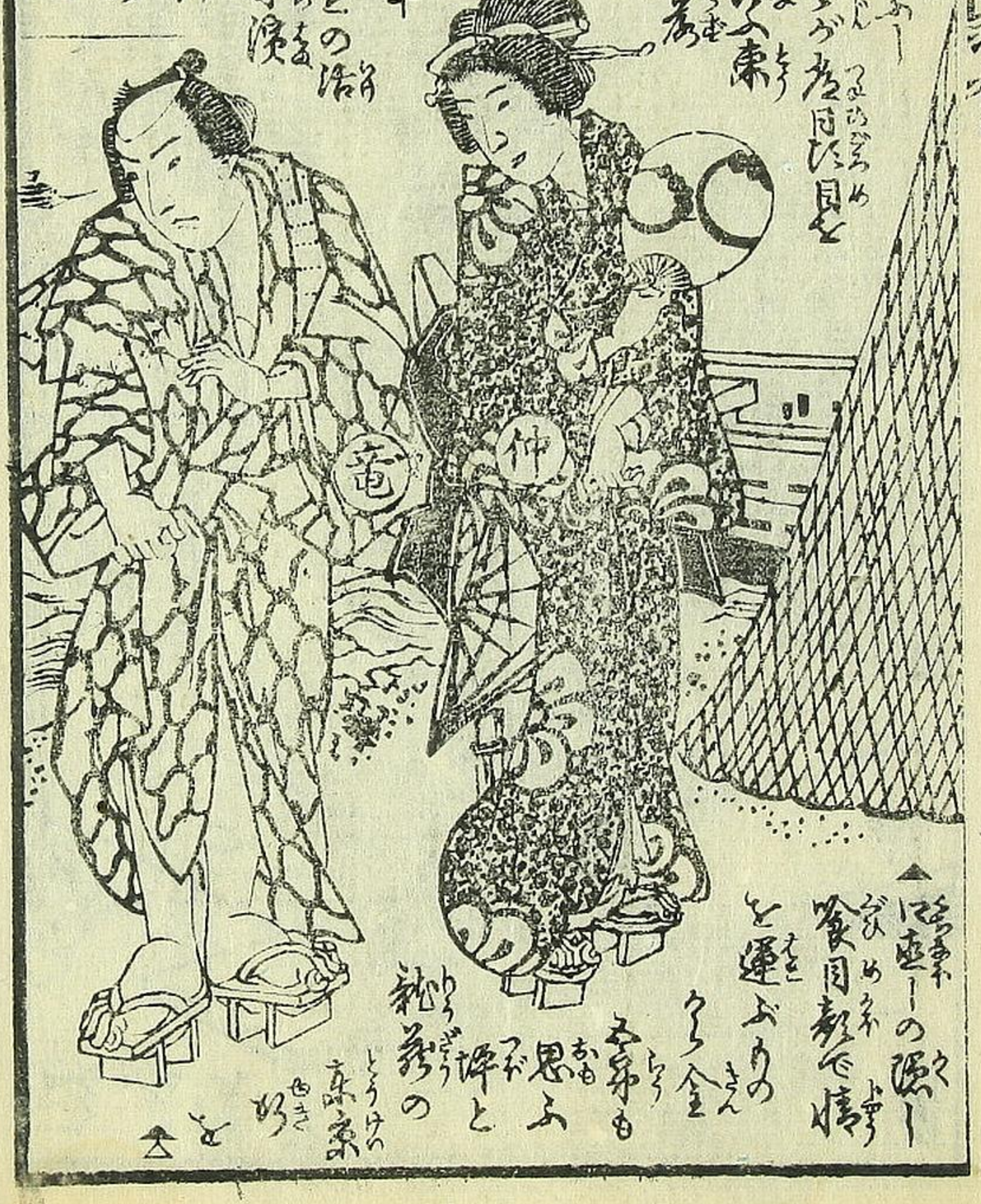


せふきおの  
 機軸者お  
 子ら仲お  
 別宅お  
 せふきお  
 みお仲お  
 全を薬お  
 んの目お  
 増まお  
 のお  
 のお



△海辺にお仲  
 の方へ入  
 お仲の機  
 儲半の  
 増の  
 らお  
 お仲

つき  
 せふきお  
 全を薬お  
 んの目お  
 増まお  
 のお  
 のお



△海辺にお仲  
 の方へ入  
 お仲の機  
 儲半の  
 増の  
 らお  
 お仲







赤心本場

ナセ

つぎのふんはくまを附揚りけふ  
 赤癩病と後の臭汗  
 赤心本場

酒叫ぶお仲の妻の満  
 かの架が関つ子燦へと  
 ぬふ燕路舞た去

云々  
 燭を  
 行くと  
 換振る  
 被る

ぬきせ

ひるがと岡めく電光  
 と務まふ種不澄空  
 ろりと暮松あり  
 備が切と顔目  
 権忠妻の  
 龍の男が廢り  
 ぞんふあふ且て此大  
 金ふ赤お仲のふらへ  
 滑入るおひ穢く穢く  
 口のふと苦しく合せ

官 朝鮮  
 計 牛 肉 丸  
 名法

官 天 泰 丸  
 計

箋 地 小 問 屋  
 錦 繪

出板御用明治十三年五月廿日

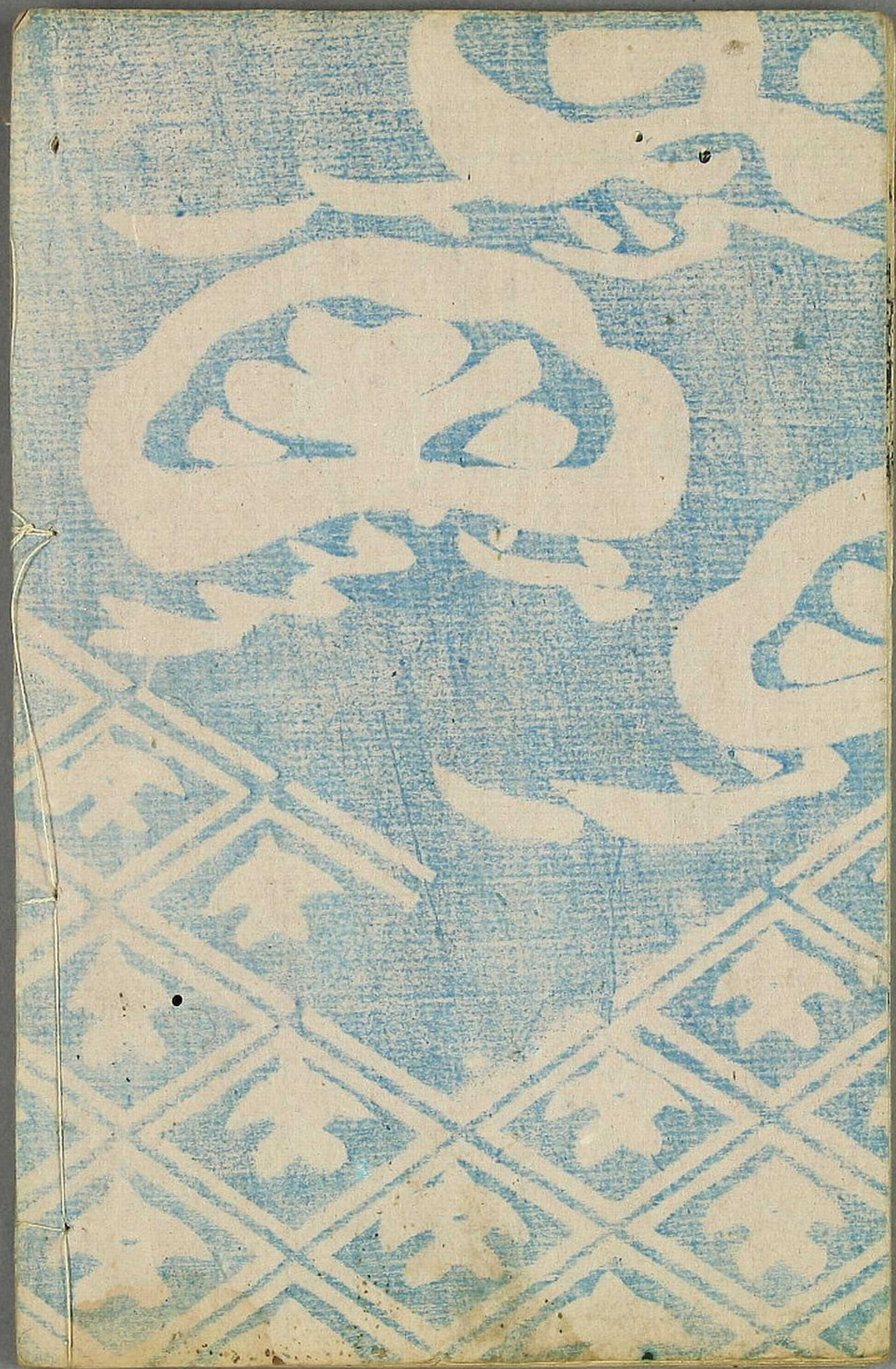
金松堂

辻 岡 文 助

川天泰丸... 妻が身たんとしたのせん  
 そのしちうまをうの毛やく此のん  
 の下りのひのさきうふうのさんせん  
 さんかのひたの小児お月せたる地  
 一切のひたしおひで地総達うあう  
 度... 今年秋虫よか...

010190517654





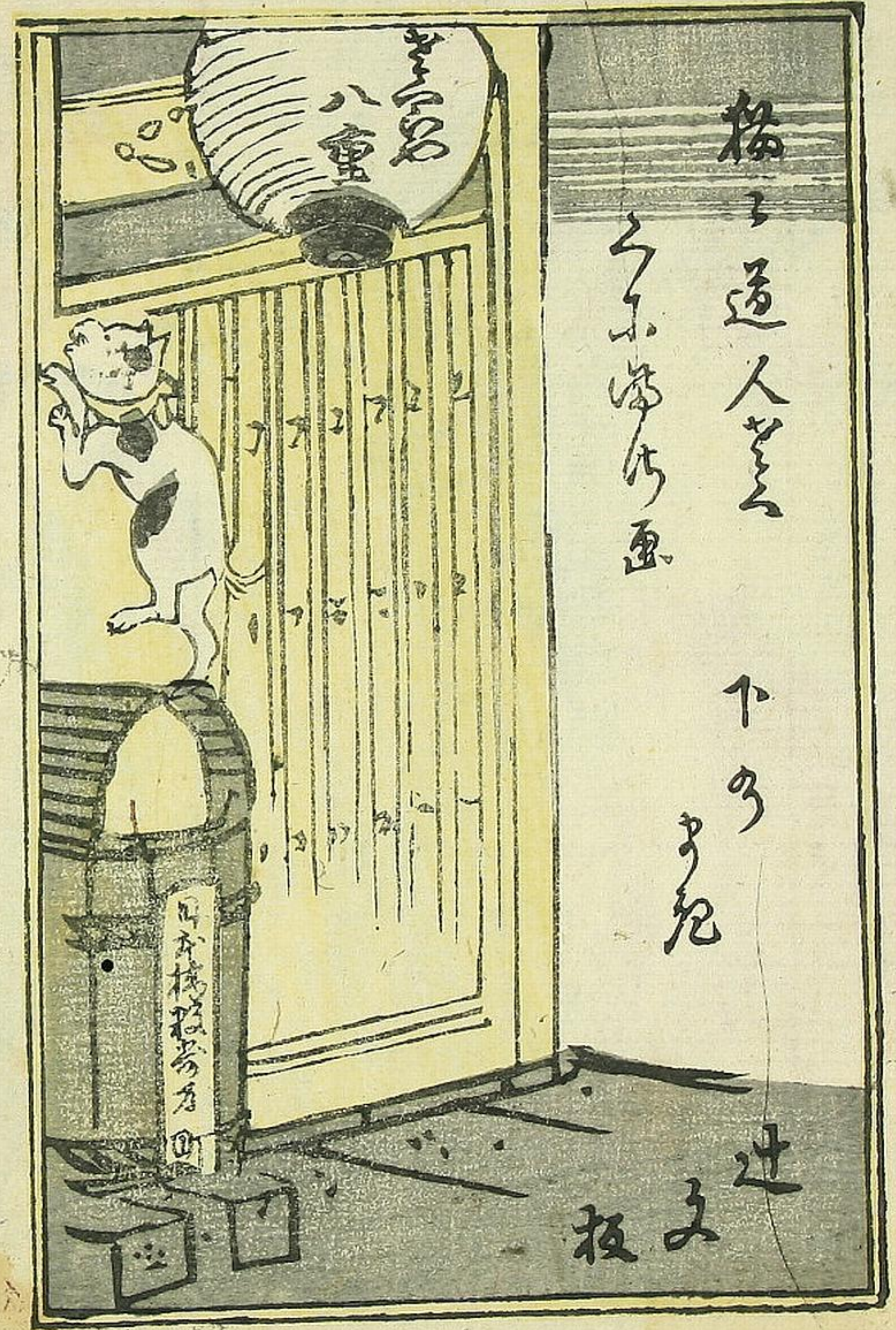


横山町  
文計

初編下  
元田長

A 516  
3

松之道人著  
くふ海舟画  
下  
り  
丸



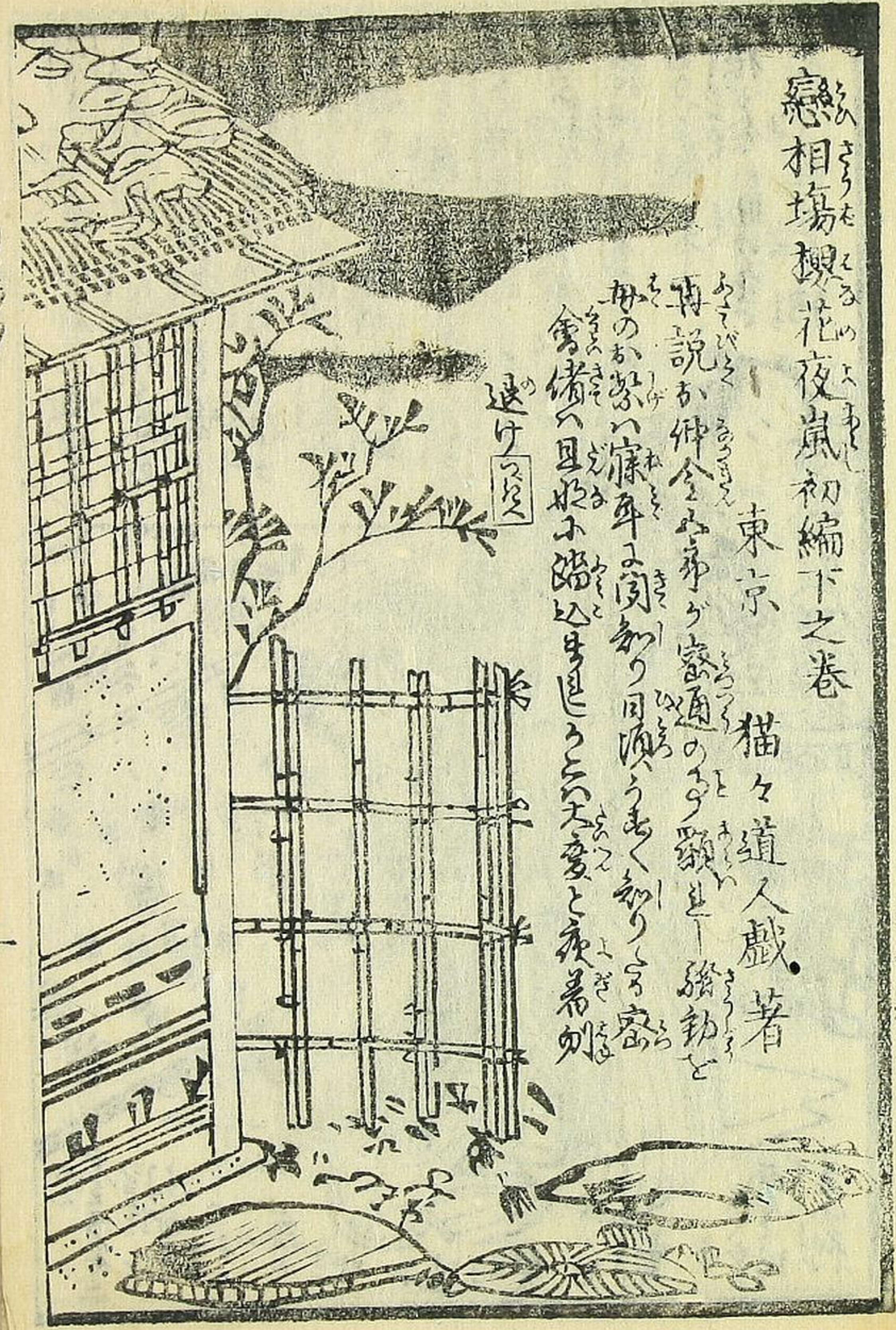
板  
又

戀相場 花夜嵐 初編 下之卷

東京 猫々道人 戯著

再説お仲全お希が密通の事 頼と一筋筋を  
おのお祭の床年子同知り同流うあく知りし密  
會備の且ぬ不踏はまはしうと天愛と夜着剣

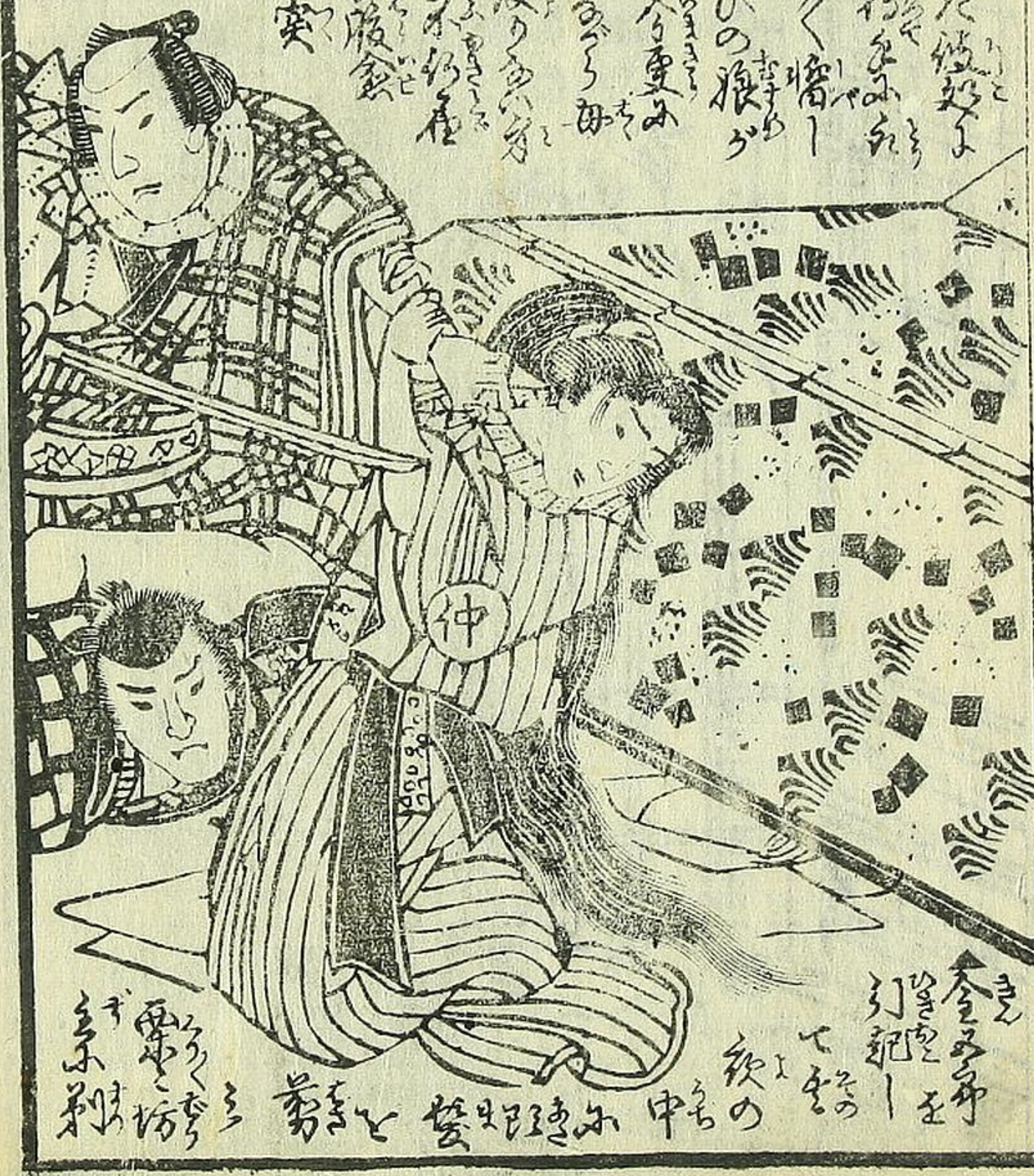
逃げつる



下  
心  
同  
易  
切  
不

48-7711

つぎ 周章のめめは彼奴よ  
 純身純身か白女持ふは  
 継ぐての候切声「ア、ア、ア、ア」  
 目眩さぬら遠くは狼が  
 深き水はひたひた分重み  
 お謝まをまも面伏さる母  
 ひもろ狼ひもろの腹りあひ  
 全く附添ふは母が不在  
 まふ起り「事件お腹金  
 みの母と切ありと突  
 ありと存ふふと  
 狼が命か助けを  
 目下下まれと口で轉



全き母  
 引籠一玉  
 夜の  
 中  
 驚  
 驚  
 驚

おん狼光漢綱文是う  
 横巻と白女持ふと  
 去と押（去と）  
 て嘆くおをちうと  
 男の「情不切を」の  
 女と優め乳給地を足ん  
 するお福を名の雅深が此後動を  
 関知りて老来を全個と第一種と不効と  
 とふ程不純を由多路の洞照止  
 うてよく「思ふふまか」  
 りふおの「お懐くお懐くお懐く」  
 さが綱持家の雅深と二河のおふ  
 海ひ攻ての腹金と踏まらう



おんお  
 裸体お  
 村松  
 追接ひその後お  
 おお母おと  
 縁結お草  
 おおと

面み...  
 方由...  
 と定り  
 多...  
 異...  
 里...  
 村...  
 知...  
 中...  
 と...  
 稍...  
 身...

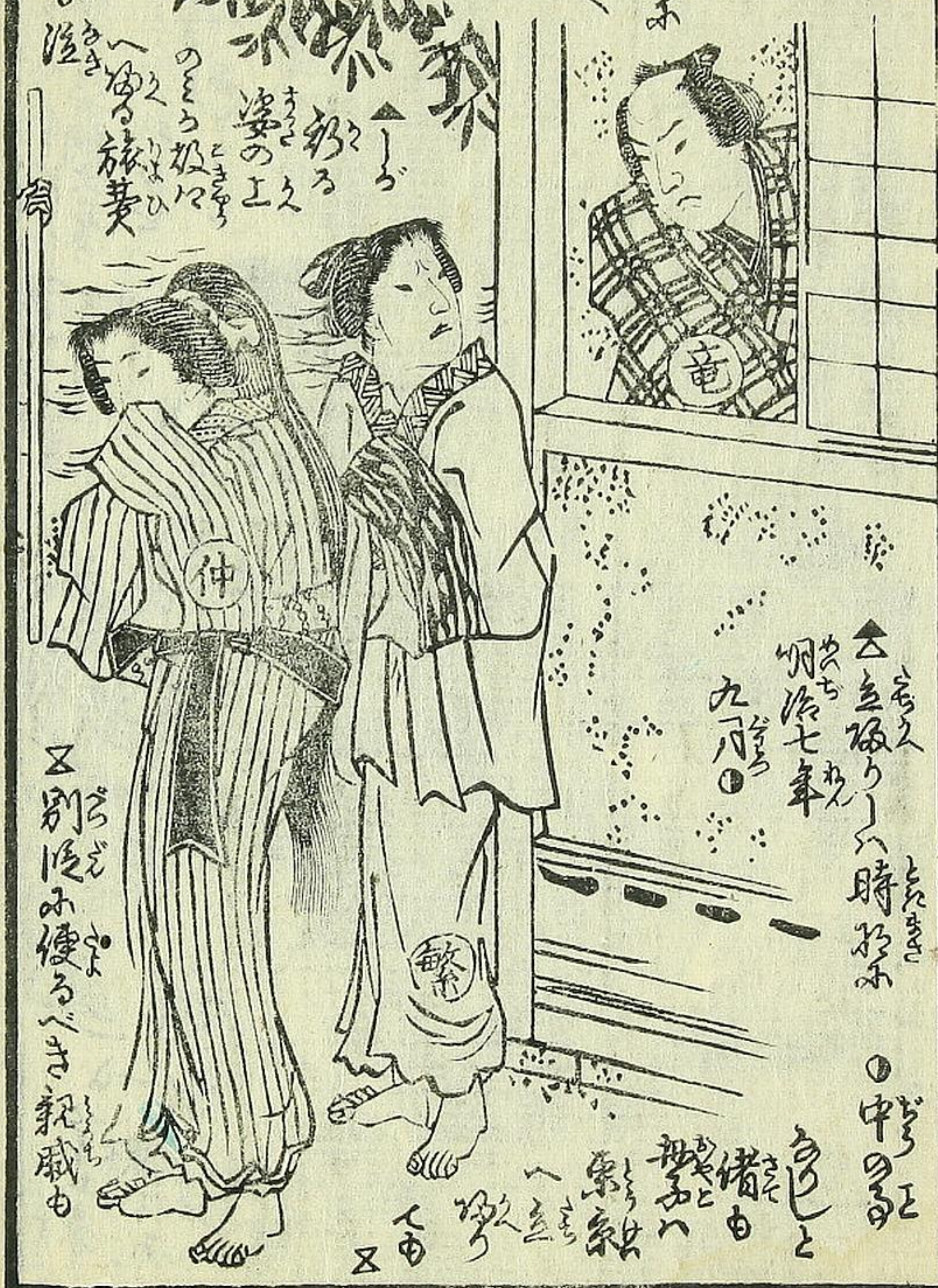


あり...  
 久...  
 長...  
 切...  
 め...  
 初...  
 又...  
 水...  
 刺...  
 名...  
 由...  
 以...  
 扱...

不...  
...  
...

三

者...  
 此...  
 源...  
 後...  
 妻...  
 妻...  
 妻...



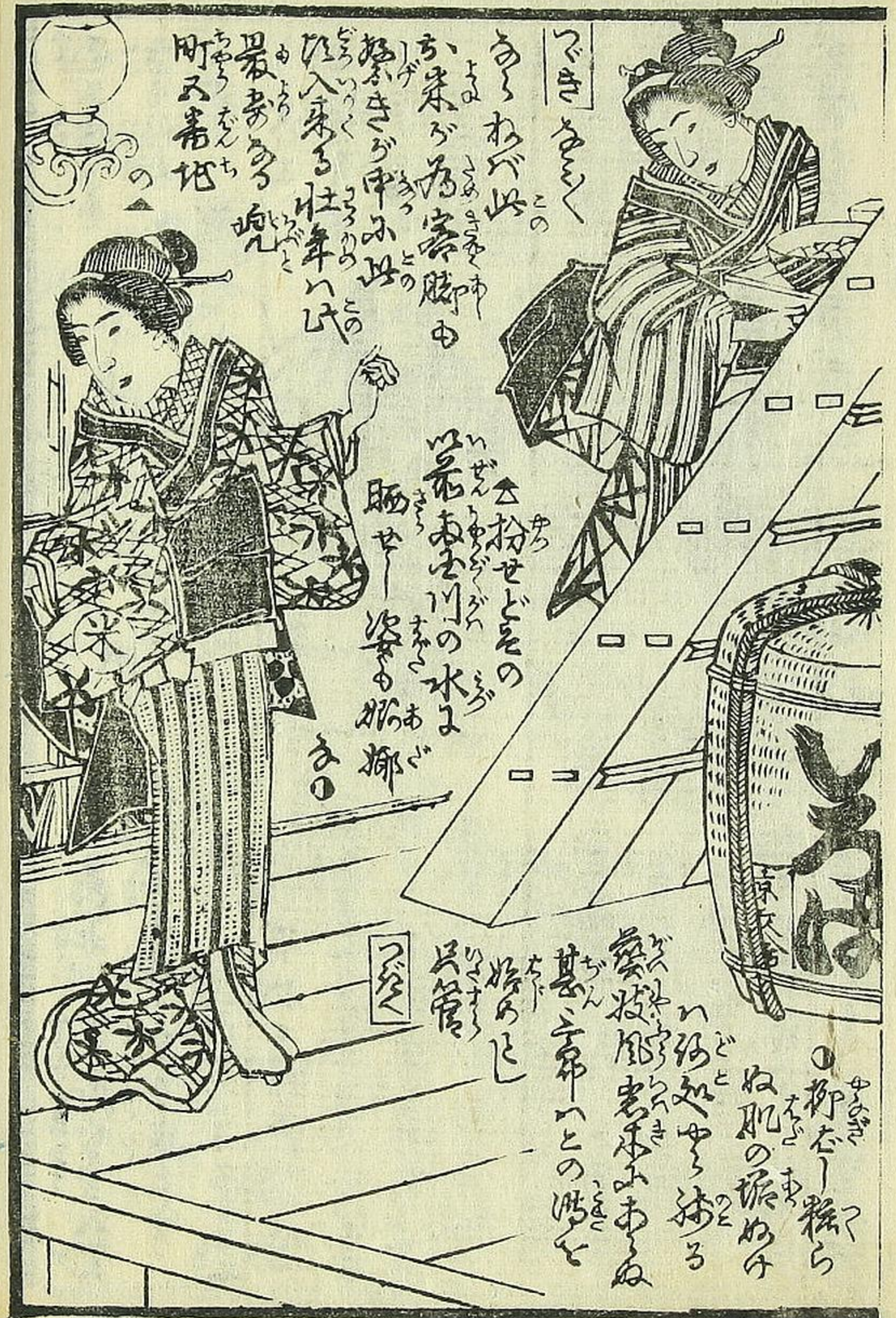
さ...  
...  
...

又...  
...

三...  
...

二

九月...  
 明...  
 中...



あゝわび  
あまが為客殿  
あまが中ふ  
あまが仕年いけ  
あまが  
あまが地

△おせいの  
いざあま川の氷よ  
あまが  
あまが

○柳をー糍ら  
ぬ肌の垢ぬけ  
いぼやちゆ  
あまが  
あまが  
あまが



▲あまが  
あまが  
あまが  
あまが  
あまが  
あまが  
あまが  
あまが  
あまが  
あまが



つま  
かき  
ひを  
思ふ  
△夕暮  
△高橋小末  
△研路の  
△すのひ  
△思ふ水の

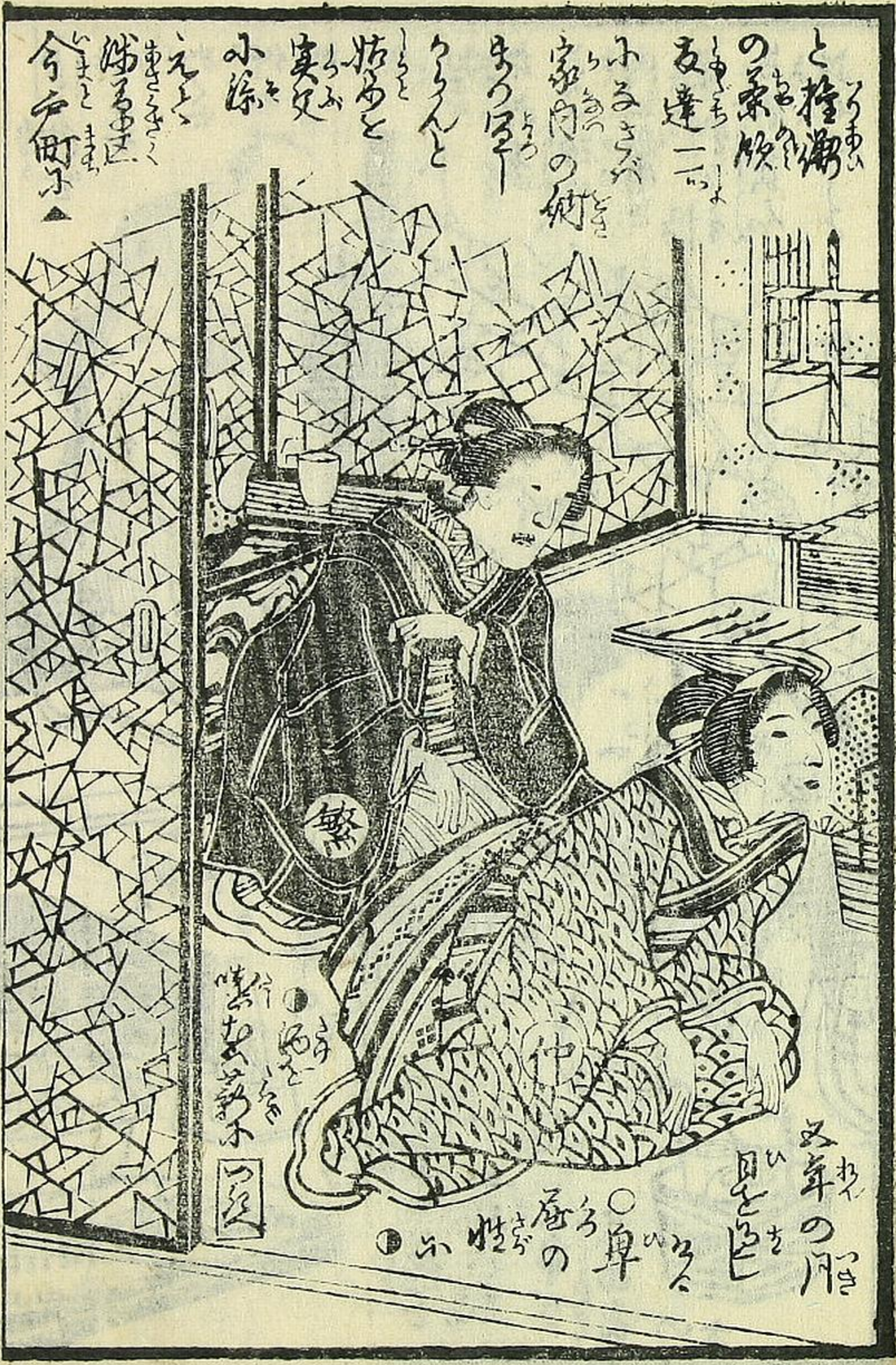
△夕暮  
△高橋小末  
△研路の  
△すのひ  
△思ふ水の

△夕暮  
△高橋小末  
△研路の  
△すのひ  
△思ふ水の



△夕暮  
△高橋小末  
△研路の  
△すのひ  
△思ふ水の

△夕暮  
△高橋小末  
△研路の  
△すのひ  
△思ふ水の



と指潮  
の系版  
五達二  
小浜  
実父  
姑母と  
今戸小

六の目身刃

一

● 小浜

○ 身  
の  
● 小浜

又年の月



つぎ  
めそその母  
か祭ふまひ  
入とつ常の  
妻ふ其ひ文  
本名か伸と  
改おさせ  
母のちおち  
幸ひ文  
の留まひ  
揚必文  
とバお祭

連相様

▲ 強居させり  
の金

其

△ 勇措と  
駈るひ何  
不返るく  
幸ふ程不  
お伸の更  
あり母のか  
志げも此上  
も多た律律  
者との美度  
やむ方のと成  
よりより母子の  
志運更持の  
中由睦まーく

五





此の子ありされば  
 其教育も皆栄  
 ありより衆ふ上総  
 の奥津まで根が  
 深の願末とも  
 濃を制止も成  
 新く汚  
 面くと  
 子と母  
 子ありう濃徳  
 した衣股ゆくと  
 東京は屏風の  
 後鏡俤みしと

みく暮すみ付て  
 の察み不足  
 友達の傍  
 仕へみ令知  
 茶飲  
 茶飲



此母子と  
 榮利と針  
 肉と味  
 よる腹の  
 本性素  
 本性素  
 仲の  
 留  
 留

此母子と  
 榮利と針  
 肉と味  
 よる腹の  
 本性素  
 本性素  
 仲の  
 留  
 留

心掛おそ



主揚り  
 叫び  
 戦を  
 投ら  
 真つひも  
 むく女の去

其  
 留

下先おあ子と引来  
 なる小血死の情  
 お仲が嘆き怒くの  
 依れ小より流石小  
 集も色  
 其  
 子  
 差  
 けと  
 連  
 疾  
 細  
 不始末と



つき  
 余くと悪意者の尻  
 尾と顔へ素より大洒乳  
 研の悪癖は是バ此  
 此へ正己ぬ替の執儀  
 乳濁濁元るて熱さを忘は  
 一合二合の原酒が持瓶一合の  
 朝より三合四合の午の  
 腹不も酒と離  
 さる源く研る  
 修りまの留るふ  
 室噪と響り  
 子強と  
 割せを

其  
 留

其  
 留  
 子  
 差  
 けと  
 連  
 疾  
 細  
 不始末と

其  
 留

其  
 留

池水地蔵

ねん 月正 呉版 十九  
番地 小賣 があるを  
買入て 此と ありけり  
佐藤 一 諸君  
情ひ 申さふらち  
妻の お仲も 荒  
知れ ぬる種  
仇 なき 無残の  
憂の 延曲と  
舟と 月と 酒と  
ありて 危角 あり  
と 尻 小 愛 産 人 と



甚 甚 箱帳  
△ 甚 之 節  
招く 小 陰 世  
と 更 小  
か 六  
全 十 明 六

て あり づ び 淡 皮 び  
の 小 牌 採 ゐ 着 就 せ ば  
何 せん け 己 が 浮 け 小 比  
静 之 候 振 の 目 録 書  
り 此 づ 為 小 産 小 女 一 下  
月 小 二 之 産 づ 出 産 者  
ま ぎ くと 産 小 の 一 下



仲 業の 甲乙が 入りて  
一夜の 候 せ づ ぐ ち  
み ぐ 元 の 本 取 採 小  
全 個 の 婚 づ 産 者  
二 年 月  
中 産 小  
離 産 小  
と 決 然  
と 産 者  
月 時 産 者  
し せ 産 者

大の親

乙

此の物語は...

...



猫々道人著 梅堂國政画

此の物語は... 同業のあ人が... 俺とよき後者のあ...

○お免の... 八重の... 梅の... 枝の...

官 朝鮮 牛肉丸 名法

官 天泰丸 包代美屋

文 錦繪 問屋

出校御届明治十一年五月廿日

日本橋區本町二丁目... 梅堂國政画

錦繪問屋 出校人 辻岡...

010190517662

